Rikkyo Clinical Psychology Research
2021, Vol. 14, 5-21

原　著

安心アタッチメント人物・スタイル質問紙（SAFS）の開発
――大学生を調査対象とした予備的研究――

立教大学大学院 現代心理学研究科　柴原　早紀 [1.]
立教大学 現代心理学部心理学科　　林　もも子

Developing the Secure Attachment Figure and Style Questionnaire（SAFS）:
Pilot study targeting university students.

Shibahara Saki（Rikkyo University Graduate school of Contemporary Psychology）
Hayashi Momoko（Rikkyo University College of Contemporary Psychology）

This study developed the Secure Attachment Figure and Style Questionnaire (SAFS), which is a self-completion questionnaire based on the Attachment Style Interview (ASI) created by Bifulco et al. (1998) and examined its validity and reliability. The questionnaire research, targeted for university students, was conducted thrice: The first and third examined the test-retest reliability of SAFS, and the second time consisted of ECR-RS to examine concurrent validity. In terms of validity, the first and second matching data (N = 186) were used. The score of attachment security in SAFS was negatively correlated to avoidance in ECR-RS and showed no correlation with the anxiety-supporting hypothesis. Regarding attachment styles, some sex-based differences were observed, which partially supported the hypothesis. Regarding women, all styles of SAFS, except “fearful”, showed a consistent relationship with ECR-RS. Regarding the fearful style, we confirmed the conceptual difference between SAFS and ECR-RS. In terms of reliability, the first and third matching data (N = 112) were used. We confirmed more than moderate agreement in the security score and attachment styles by calculating Spearman’s rank-correlation coefficient and Cohen’s K.

Key words : attachment, secure attachment figure, validity, test- retest reliability

アタッチメントとは, Bowlbyが1960年代に提唱した, 安心な人間関係を求める人間の行動傾向に関する概念である（Bowlby, 1969/1982 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1991 ）。アタッチメント・システムは, 哺乳類や鳥類に共通して生得的に備わっている行動傾向であり, 「個体がある危機的状況に接し, あるいはまた, そうした危機を予知し, 恐れや不安の情動が強く喚起された時に, 特定の他個体への近接を通して, 習慣的な安全の感覚（felt security）を回復・維持しようとする傾性」（遠藤, 2005, p.4）と定義される。Bowlby（1980, 黒田他訳 1991）によると, アタッチメント行動は恒常性保持システムを持つ行動であり, 子どもから大人になるまで生涯を通じて存在し, 活動するものである。また, Bowlby（1969/1982, 黒田他訳, 1991）は, アタッチメント対象は, 青年期以降に親から友人へ, そして性的関心を伴ったパートナーへ移行すると述べた。 それを支持する実証的な研究結果も得られている（Hazan & Shaver, 1987 ; Fraley & Davis, 1997）。Steinberg et al. （1986）は, 青年期には, 探索行動として親から離れ, 友人や恋人に対して, 悩みを打ち明けたり, 情緒的サポートを得る対象として親密な関係を築くようになったりすると述べた。この場合, 悩みを打ち明けることで情緒的サポートを引き出すという行動がアタッチメント行動に該当する。遠藤（2005）はアタッチメント行動の発達について, 発達初期の物理的近接によってのみ安全の感覚を得られる状態から, イメージや主観的確信による近接の感覚である, 表象的近接によっても得られる状態へ漸次的に移行するとした。

Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall（1978）はBowlbyが提唱した理論を受け, ストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure以

下, SSPとする）を開発した。SSPは, 統制された実験場面において乳児にアタッチメント行動を喚起させるようなエピソードが設定され, 乳児と母親との相互的な行為を観察し, 評定する研究法である。Ainsworth et al.（1978）はSSPにより, 母子関係をA. 回避型, B. 安定型, C. 両価（アンビバレント）型の3タイプに分類し, アタッチメント行動の個人差を分類する研究方法として, その後のアタッチメント研究の基礎を築いた。

成人のアタッチメントの個人差を測定する研究法には大きく2つの流れがある。Table 1にアタッチメント測定法とスタイル分類を整理した。1つは精神分析理論に基づき, 幼少期の親子関係において形成される無意識的な内的作業モデルを重視し, アタッチメントの質のパターンが世代間伝達することを予想するという, 成人アタッチメント面接（Adult Attachment Interview以下, AAIとする）（Main & Goldwin, 1984）をはじめとする研究の流れである。この流れにおける測定法の大きな特徴として, 子ども時代の報告に基づいた測定であることが挙げられる（Bifulco & Thomas, 2013 吉田・林・池田監訳 2017）。

もう1つは, 個人が選択的に構築できる現在の対人関係の関係性を重視する社会心理学の流れである。Bowlby（1969/1982, 黒田他訳, 1991）は, アタッチメント・システムはこの世に生を受けてから墓場へ行くまで機能する生得的なシステムであると言及していた。つまり, 人は成人期以降もその対象を変えながらアタッチメント行動をし続けるという論が提唱されていたが, 実証的研究の流れは, Hazan & Shaver（1987）が, 青年期以上のアタッチメントの質について研究し, 恋人や親密な他者との関係へとアタッチメント理論を拡張したことに端を発する。Fraley & Shaver（2000）は3つの要点にまとめている。1点目は, 乳児と養育者の関係と恋人関係における情動および行動の動きは, 同じ行動システムによって説明できるということであること, 2点目は, 乳児と養育者の関係と恋人関係において, 同じ種類の個人差が見られるということである（Fraley & Shaver, 2000）。また, 3点目は, 成人期のアタッチメント行動は, 主に養育者との早期の経験を基礎として, その後の人生におけるアタッチメント経験から形成された予測や信念である作業モデルが反映され, 個人差を生み出すということである。Hazan & Shaver（1987）は調査参加者を安定型, 回避型, 両価型に分類する強制選択式の尺度を用いた。一方, Bartholomew & Horowitz（1991）は, 成人のアタッ

Table 1
各アタッチメント測定法の一覧とスタイル分類

社会心理学系				精神分析系
RQ（Batholomew & Horowitz, 1991）	ECR（Brennan, et al. , 1998)	ASI（Bifulco, et al, 1998）	SAFS	AAI（Main & Goldwin, 1984）
質問紙	質問紙	面接法	質問紙	面接法
2 次元 4 分類	2 次元 4 分類	5 分類	5 分類	4 分類
安定型	安定型	安心型	安心型	安定型
とらわれ型	とらわれ型	とらわれ型	とらわれ型	とらわれ型
		恐れ型	恐れ型	
拒絶回避型	回避型	引っ込み型 , 怒り - 拒否型	引っ込み型 , 怒り - 拒否型	拒否（回避）型
恐れ型	恐れ型	二重型	二重型	未解決 / 無秩序型

チメント・スタイルを自己モデルと他者モデルの2次元から4類型に分類するモデルを提案し, RQ（Relationship Questionnaire）を開発した。自己モデルとは, 自分が愛され, サポートを受けるに値するかの信念であり, 他者モデルとは, 他者は信頼でき, 利用可能であるかについての信念である。この2次元における高低の組み合わせから, 自己モデルも他者モデルもポジティブである安定型, 自己モデルがポジティブで他者モデルがネガティブな拒絶回避型, 自己モデルがネガティブで他者モデルがポジティブなとらわれ型, 自己モデルも他者モデルもネガティブな恐れ型という4類型ができる。RQは, この4類型のいずれかに分類する強制選択式の尺度であり, さらにその分類に自分がどの程度当てはまるかをリッカート形式で評定できる（Griffin & Bartholomew, 1994）。

意識的なアタッチメント行動およびアタッチメント行動に対する態度を測定するアタッチメント・スタイル面接（Attachment Style Interview 以下, ASIとする）（Bifulco, Brown, Lillie, Ball, & Moran, 1998）はこの社会心理学の流れにある半構造化面接法のアタッチメント測定法である。Bifulco, Moran, Ball, & Bernazzani（2002a）は, うつ病の発症因子とアタッチメントについて検討した先行研究（Murphy & Bates, 1997; Mickelson et al., 1997; McCarthy, 1999; Gerlsma & Luteijn, 2000）において, いずれの非安心（insecureの訳語として旧訳「不安定」にかわり新訳「非安心」を使用する）型アタッチメント・スタイルがうつ病の発症因子となるかについての結果に一貫性がないことを指摘した。そして, 結果の矛盾を生じさせた理由として, Bartholomew & Horowitz（1991）の4類型のうち, 拒絶回避型について, 身近な対人関係内での葛藤の有無に関わる攻撃性の高さの違いが加味されていなかったためであると論じた。そこで, Bifulco et al.（1998）は, 拒絶回避型を攻撃性の高い「怒り-拒否型」と, 攻撃性の低い「引っ込み型」の2つにさらに分類し, それらに加えて「明らかな安心型」（secureの訳語として, 旧訳「安定」にかわり, 「安心」という新訳を使用する）, 「とらわれ型」, 「恐れ型」の計5つのアタッチメント・スタイル分類を提案し, ASIを開発した。

BifulcoらはASI作成にあたり従来の研究における他のアタッチメントの評価法を概観した（吉田・林・Bifulco, 2003）。その中で, AAIは評定手続き修得の複雑さ, コミュニティ・サンプルでの検証の実施しにくさを限界として指摘した（吉田他, 2003）。また, AAIが過去の親との関係についての内的表象に焦点を当てて質問し, 現在の対人関係におけるアタッチメントの評定をしていない点も精神障害の発症についての前方視的モデルを実証的に検証する際に問題であるとした（吉田他, 2003）。現在の対人関係におけるアタッチメント・スタイルの評定法としてPeer Attachment Interview（Bartholomew & Horowitz, 1991）もあるが, これは青年期を対象に友人, 恋人との関係のみを測定するものであり, 成人期において重要な配偶者や親密なサポート人物との関係が検討されていないという限界がある（吉田他, 2003）。ASIはこれらの限界を踏まえ, 成人の現時点でのサポート関係を築き維持する能力を評価するよう構成されており, 幼少期を想起する質問は含まない。面接では評定者がこの能力の根拠となる事実を, 被面接者が経験した実際の出来事を含めて聴取し, アタッチメントに関する態度や行動を確認し, 定められた基準に基づいて面接者が評定する（吉田他, 2003）。

ASIは安心アタッチメント関係を作り維持する能力を測定する第1相と, アタッチメント・スタイルを測定する第2相からなる（林, 2010）。第1相において現在のアタッチメント対象として, 否定的な感情状態の時に心のうちを打ち明け, 月に一度以上は接触するような「非常に親しい人（Very Close Other 以下, VCOとする）」を質問によって特定し, その関係の質を評定する（林, 2007）。さらにVCOとの関係の安心性を評定し, 「安心アタッチメント対象」と評定されるVCOの人数が「人間関係を作り維持する能力」を示し, 4段階で評価される。人間関係を作り維持する能力が「非常に」「中程度に」非安心（insecureを旧

訳の「不安定」ではなく新訳「非安心」と表記する）であれば非安心型,「軽く」非安心と「明らかな安心型」であれば「安心型」と分類する（林, 2010）。第2相では, アタッチメント・スタイルを,「不信感」,「親しくなることへの妨げ」,「自己信頼」,「親密さへの欲求」,「拒絶されることへの恐れ」,「離れることへの恐れ」,「怒り」の7つの尺度により測定し, アタッチメント・スタイルを同定する（林, 2010）。最終的に, 安心アタッチメント対象を獲得する能力としての「人間関係を作り維持する能力」と7つの下位尺度を総合したプロフィールを組み合わせて, 安心型, 非安心型, 二重/無秩序型の中の各アタッチメント・スタイルである, 明らかな安心型, とらわれ型, 恐れ型, 怒り-拒否型, 引っ込み型を13分類で同定することができる（Bifulco & Thomas, 2013 吉田他監訳 2017）。

Bifulco, et al（2002a）およびBifulco, Moran, Ball, & Lillie（2002b）では, 一般医を受診したうつ病発症の心理社会的脆弱性をもつ女性をハイリスク質問票を用いてスクリーニングし, a）幼少期の虐待経験, b）家族や親しい人との間に葛藤を抱え, 打ち明け対象がいない, c）低い自己評価などのうつ病の脆弱因子を抱える222人のハイリスクサンプルと80人の対照群を得, ASIを実施した後, 12か月間うつ病発症をモニターした。ロジスティック回帰分析の結果から, とらわれ型, 恐れ型, 怒り-拒否型がうつ病発症を予測するモデルがいずれも1%以下の水準で有意であった一方, 引っ込み型については関連が見られなかったことから, 拒絶回避型の2分類が有効であることを裏付けた（Bifulco, et al, 2002a）。また, うつ病発症因子として非安心型アタッチメント・スタイル, サポートを与えてくれる親密な他者の欠如, 幼少期の虐待経験があることが示された（Bifulco, et al, 2002b）。

日本では, ASIは吉田（2001）により導入され, 主に臨床心理学的な研究に用いられている。吉田・林・Bifulco（2003）において, 信頼性と有用性の検討がなされた。吉田他（2003）は, 成人女性16事例について, ASIのトレーニングを受けた著者の1人が実施した面接結果について, 著者らが独立に評定した結果の評定者間一致率を算出した結果, アタッチメント・スタイル分類の評定および安心性の評定に関して κ =.80以上のカッパ係数が得られている。また, 子どもの不適応の問題で専門機関に相談しているサブクリニカル群8人と, そうでない健常群8人について直接確率により比較した結果, サブクリニカル群の方がアタッチメント・スタイルが非安心である割合が高かった（吉田他, 2003）。Ikeda, Hayashi, & Kamibeppu（2014）は76人の日本人初産婦を対象に, 妊娠後期に測定したASIによるアタッチメント・スタイルおよび抑うつと, 産後一か月以降の抑うつを検討し, 産後うつ病の関連要因を検討した。その結果, 非安心型アタッチメント・スタイルが産後うつ発症の関連要因となることが示された（Ikeda et al., 2014）。また, Ikeda et al.（2014）はBifulco et al.（2002a）の対象者と比較し, 非安心型スタイルの中でも特に引っ込み型の構成比多かったこと, 学歴や経済的状況の偏りに違いがある可能性を示した上で, Bifulco et al. （2002a; 2002b）のデータよりも産後うつ病群の引っ込み型の割合が多かったことから, 引っ込み型のリスクも示唆した。さらに, 臨床心理学的な症例研究として, 岩崎・山崎（2017）は, 臨床場面において治療継続に支障をきたした児童期の発達障碍児を持つ母親6症例について検討した。全症例の母親に対しASIを実施した結果, 全員が恐れ型であったこと, また, この非安心なアタッチメント・スタイルをより安心型に近づける関わりが治療継続に奏効したことから, 臨床的な有効性を示唆した（岩崎・山崎, 2017）。

ASIと同じく社会心理学系の研究の支流にある質問紙法として, Brennan, Clark, & Shaver（1998） による, 親密な対人関係体験尺度（Experiences in Close Relationships inventory 以下, ECRとする）が挙げられる。Bartholomew & Horowits （1991）以降, 成人アタッチメントの個人差をとらえるのには3分類よりも4分類の方が適

しているとされていたが, タイプは次元に比べて高低群に分けた時の真ん中の情報を損失してしまうため, 次元を用いた分析の方がよいのではないかとする見方があったことに加え, 因子数や測定内容が異なる尺度が作成されたため, その結果の統合が困難であることが指摘された（Brennan, Clark, & Shaver, 1998）。そこで, Brennan, et al.（1998） は大学生1086人を対象に, 14の成人アタッチメント・スタイル尺度を実施し, 60の下位尺度を抽出した上で, さらに2次因子分析を行った結果, 「回避」「不安」という2次元構造であることを見出し, ECRを開発した。ECRはアタッチメント研究において広く使われており（Ravitz, Maunder, Hunter, Sthankiya, & Lancee, 2010）, 日本でも恋人版ECR（中尾・加藤, 2004a）や一般他者版ECR（中尾・加藤, 2004b）などが作成された。ECR（中尾・加藤, 2004a）, 一般他者版ECR（中尾・加藤, 2004b）は, いずれもBrennan, et al.（1998）と同様, 「親密性回避」と「見捨てられ不安」の2因子構造である。概念的に, 親密性の回避は否定的な他者観に特徴づけられており, 見捨てられ不安は否定的な自己観に特徴付けられるとされ, 結果としても親密性の回避と否定的な他者観との関連が示された一方, 見捨てられ不安尺度は他者観との有意な相関が見られなかった（中尾・加藤, 2004a）。また, この2つの尺度の高低とRQによるアタッチメント・スタイル分類との関連も示されている（中尾・加藤, 2004a; 2004b）。すなわち, ECRないしECR-GOにおいて, 親密性回避が低く, 見捨てられ不安も低い群は「安定型」, 親密性回避が高く見捨てられ不安が低い群は「拒絶回避型」, 親密性回避が低く見捨てられ不安が高い群は「とらわれ型」, 両特性が高い群が「恐れ型」とされる。その後, より項目数が少なく, 複数のアタッチメント対象を想定することができるExperience in Close Relationships-Relationship Structure（以下ECR-RSとする）（Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh, 2011）が作成され, 日本語版の信頼性・妥当性が検討された（古村・村上・戸田, 2016）。古村他（2016）は, インターネット調査によって得られた一般成人1086人のデータから因子構造確認し, 自尊心や抑うつ, 再認傾向との関連を検討した後, 大学生563人を対象に調査し, 確認的因子分析を行っている。また, ECR-GO, RQなどの他のアタッチメント測定尺度との関連について, ECR-RSの「回避」と, ECR-GOの親密性回避, RQの他者モデルとの間に関連が示され, ECR-RSの「不安」とECR-GOの見捨てられ不安, RQの自己モデルとの間に関連が示された。さらに, 464名の大学生対象に再検査信頼性の確認も行われている。

アタッチメント測定における次元か類型かという議論について, Ravitz, et al.（2010）は研究領域における個人差のより詳細な検討のためには, 次元的理解が有用であると述べる一方で, 類型は臨床的な診断や介入のすばやい判断において役に立つと論じている。ASIにおける非安心型のスタイルはうつ病や不安症の脆弱因子としてはたらくことが示されている（Bifulco, et al., 2002b）ことに加え, 虐待経験や世代間伝達に関する研究知見も示されている。対象者の幼少期の虐待経験とその後の精神疾患の間にアタッチメント・スタイルが媒介変数となり得ることを検討した調査では, 恐れ型, 怒り-拒否型において有意な結果が得られた一方で, とらわれ型, 引っ込み型では関連が見られないなど, 引っ込み型は他の非安心型と異なり, 精神疾患の罹患率の少なさ, 逆境となるライフイベントの少なさが示唆されている（Bifulco, Kwon, Jacobs, Moran, Bunn, & Beer, 2006）。さらに, 母親の非安心型アタッチメント・スタイルが, 母親の養育態度を媒介して子どもへの虐待や子どもの抑うつ・不安に影響することが示されている（Bifulco, Moran, Jacobs, & Bunn, 2009）。したがって, 拒絶回避型を2つに分けたアタッチメント・スタイルの5分類は, 精神疾患やそれに類する心理的問題を検討する臨床心理学的な研究を行う上で有効であると考えられるが, 現在質問紙法において, 同様のスタイル弁別ができる測定法が見られない。

本研究では, ASIに基づき, 安心性の程度と5つ

のアタッチメント・スタイル分類を測定する自己報告式質問紙である安心アタッチメント人物・スタイル質問紙（Secure Attachment Figure and Style Questionnaire以下, SAFSとする）の開発および妥当性, 信頼性の検討を目的とする。SAFSはASIの二相構造を踏襲し, アタッチメントの安心性を測定する項目と, スタイルを分類する項目に分かれている。ASI同様にアタッチメントの安心性をVCOの人数により測定する。アタッチメント・スタイルは, ASIの第2相の態度尺度の組み合わせによる各スタイルを要約して作成した選択肢から, 最も自分に当てはまると思うものを選択させる。SAFSの併存的妥当性について, ECR-RS（古村他, 2016）との関連を検討し, アタッチメント・スタイルの分類およびECR-RSの下位尺度（回避・不安）との関連を検討する。ECR-RSはアタッチメントの安心性の程度を測定することができないこと, および2軸4分類のアタッチメント・スタイルの同定では, ASIによる5分類を同定することができないという限界があるが, ASIと同様にBatholomew & Horowitz（1991）の流れを汲み, 恐れ型を加えた分類ができ, 既存の質問紙の中では比較的ASIの分類に近い分類が可能であること, また高い信頼性, 妥当性を保持する尺度であることから, この尺度を選択した。

ECR-RSの基となるECR（中尾・加藤, 2004a）では, 概念的に, 親密性の回避は否定的な他者観に特徴づけられており, 見捨てられ不安は否定的な自己観に特徴付けられるとされ, 研究結果においても, 親密性の回避と否定的な他者観との関連が示された一方, 見捨てられ不安尺度は他者観との有意な相関は見られなかった（中尾・加藤, 2004a）。本研究におけるSAFSの安心性得点は, 対象者が安心アタッチメント関係を築いているVCOの人数により測定されるため, 肯定的な他者観を反映していると考えられる。

以上により, 本研究の仮説は以下の通りである。（a）SAFSの安心性得点はECR-RSの親密性回避得点と負の関連を示し, 見捨てられ不安得点との関連を示さない, （b）SAFSによるアタッチメント・スタイルとECR-RSによるアタッチメント・スタイルについて, SAFSの安心型, とらわれ型, 恐れ型がそれぞれ, ECR-RSの安心型, とらわれ型, 恐れ型と関連し, SAFSの回避型, 怒り・拒否型が拒絶型と関連する。本研究の目的は, 以上の仮説を検討してSAFSの妥当性を検討すること, およびSAFSの再検査信頼性を検討することである。

方法

対象者

対象者は関東圏内私立大学の学部生で, 1回目調査の回答者数は270人, 2回目調査は232人, 3回目調査は138人であった。そのうち, 質問紙の妥当性分析に必要な調査である, 1回目調査と2回目調査の両方に回答した有効回答者数は186人で, うち男性が46人, 女性が140人であった。平均年齢は全体で19.1歳（$SD = 1.21$, 年齢幅は18-26歳）, 男性が19.3歳（$SD = 1.55$, 年齢幅は18-26歳）, 女性が19.1歳（$SD = 1.10$, 年齢幅は18-23歳）であった。

また, 信頼性分析に必要な調査である, 1回目調査と3回目調査の両方に回答した有効回答者数は112人で, 男性が27人, 女性が85人であった。年齢幅は18歳から22歳であった。平均年齢は全体で18.9歳（$SD = 0.87$）, 男性が19.2歳（$SD = 1.12$）, 女性が18.7歳（$SD = 0.74$）であった。

調査時期と場所

2018年の9月から12月の間に, 関東圏内の私立大学において, 各授業実施教室にて調査を実施した。

安心アタッチメント人物・スタイル質問紙（Secure Attachment Figure and Style Questionnaire以下, SAFSとする）の作成過程

SAFSは著者の1人がASI-Jの評価マニュアル（Bifulco, Lillie, Ball, & Moran,2002 林・吉田監修 2016）における面接項目, およびASI-Jに分類されるアタッチメント・スタイルの定義に基づき質問項目を作成した。構成はASI-Jと同様の第1相, 第2

相の構造を踏襲している。SAFSにおける第1-2問はASI-Jの第1相に当たる。SAFSの第1問では, 安心なアタッチメント関係にある親密な他者（Very Close Other以下VCOとする）の定義を示し, 当てはまる人物の人数を尋ねた。定義は（a）「私はその人に月に一度以上は会って個人的な話をしている。（遠いなど事情があって会えない場合は, 月に一度以上, 電話で気持ちも含めて個人的な話をしている, または, 月に一度以上, その人だけに読める形のメールやSNSで, 気持ちも含めて個人的な話をしている）」,（b）「私は, 自分にとって大変な出来事（不安, 苦しい, つらい, 怖い, どうしていいかわからないなど）が起きた時には, その人に自分の心の底にある気持ちも含めて打ち明けて話す。」,（c）「私にとって大変な出来事や問題と, それについての気持ち（不安, 苦しい, つらい, 怖い, どうしていいかわからないなど）を打ち明けると, その人は, いつも私の身になってよく聴いてくれる。」,（d）「私にとって大変な出来事や問題をその人に打ち明けると, その人は必ず私を慰めてくれたり, 励ましてくれたりするなど, 安心させてくれ, 支えてくれる。」,（e）「その人がいなくなってしまったら, 私は非常に心細いし寂しいと感じるだろう。」,（f）「私にとってその人は大切な, かけがえのない人だ。」の6項目であり, これら全てに当てはまる人物を安心アタッチメント対象と定義した。これらはASIの第1相の評価マニュアルに準拠した安心アタッチメント対象の定義であり（Bifulco, et al.,2002 林・吉田監修2016）, この安心アタッチメント対象の人数をアタッチメントの安心性を示すものとした。2問目では, 思い浮かべた人物が自分とどういう関係性であるかを9項目（父, 母, きょうだい, 子ども, 親きょうだい子ども以外の親族, 友人, 恋人, 配偶者, その他）から選択するよう教示した。3問目はASI-Jにおける第2相に相当し, ASI-Jに基づき定義された5つのアタッチメント・スタイルの記述から, 自分に最もよく当てはまると思うものを1つ選択する強制選択式の項目とした。その際, 「どうしても1つだけを選ぶのが難しく, 2つあてはまると思う人は, 2つ選んでも結構です。」という教示も加えた。ここで2つ選ばれた場合, ASI-Jで評定される二重型と見なした。アタッチメント・スタイルの記述はとらわれ型, 引っこみ型, 恐れ型, 怒り - 拒否型, 安心型の5つであり, それぞれの特徴はASI-Jの第2相における態度尺度の基準を基に記述した（Bifulco, et al.,2002 林・吉田監修2016）。例えば, とらわれ型の記述は「私は, 困った時に人に助けを求めることができます。人から拒絶されるのが恐いと感じることはあまりありません。私は, あまり自信がない方で, 人に頼りたいと感じることが多いです。私は人となるべく親しくなりたいと思います。身近な人が自分から離れていくことが心配です。身近な人と離れていると不安になることがあります。」である。ここではASIにおけるとらわれ型の基準となる,「人に近づくことへの妨げ」,「拒絶されることへの恐れ」,「自己への信頼」の低さと,「親密さへの欲求」,「離れることへの恐れ」の高さが表現されている。その他4項目についての詳細と, ASIの基準との対照表を付録に記載した。なお, この数行の記述からスタイルを選択する強制選択式の方法はRQをモデルにしており, 日本語版も妥当性の確認がなされている（加藤, 1998/9）。

SAFSは, アタッチメント研究に精通する第2著者を含めた研究者2人で項目内容の妥当性を確認しつつ作成され, さらに, ASI-J研究会のメンバー5人により内容の妥当性が確認された。

質問紙を構成する尺度

使用した尺度はSAFSおよび, ECR-RS（古村他, 2016）（9項目, 7件法）であった。

古村他（2016）が日本語版ECR-RSを作成した際は, 対象を1人思い浮かべてその人について質問に答えるよう教示されていたが, SAFSにおいては一般他者を想定し, 回答者のアタッチメント・スタイルを同定することを目的としている。したがって, 今回SAFSの併存的妥当性を確認するためにECR-RSにおいて回答者の他者一般に対するアタッチメント行動の傾向・態度を測るものとし

て, 項目の「その人」を全て「人」に変更し, さらに日本語として不自然でないように文を整えて使用した。

フェイス項目として 性別, 年齢, 学年を尋ね, さらに複数回の質問紙調査において個人内のデータを一致させるために, 匿名性が保たれる個人IDを, 作成方法を教示して回答者自身に作成させた。

手続き

3つの授業時間内において, 質問紙調査を研究者自身が説明した上で実施した。調査は1つの授業において3回に分けて行った。1回目はSAFSのみの質問紙調査を, 2回目はECR-RSのみの質問紙調査を1回目から7日後に実施した。3回目はSAFSのみの質問紙調査を1回目から21日以上の期間を空けて実施した。3回目の実施は3つの授業において21日後, 28日後, 35日後だった。

SAFSとECR-RSは, 項目の中に類似の表現を含む部分があるため, 同時に実施することで回答が相互に影響する可能性を排除するため, SAFSとECR-RSは1週間以上の間を置いて別の日に実施した。

倫理的配慮

本研究はA大学倫理委員会の承認を得た（承認番号: 18-45）。

結果

分析対象者の検討

SAFSについて, 第一回目調査の有効回答者186人について, サンプル数に男女の偏りがあったため, SAFSの男女差を検討した。まず, SAFSによる安心性得点はVCOの人数が3人以上で4点, 2人が3点, 1人が2点, 0人が1点である。この安心性得点について, 男性の平均値は2.2（SD = 1.25, 中央値2.0, 最小値1.0, 最大値4.0）, 女性の平均値は2.0（SD = 1.07, 中央値2.0, 最小値 1.0, 最大値4.0）であった。男女差を検討するために, Mann-WhitneyのU検定を行ったところ, 有意な男女差は見られなかった（p = .25 , ns）。次に, 性別とSAFSによるアタッチメント・スタイルについて, χ^2検定を行った。クロス集計表および残差分析の結果をTable 2に示した。χ2検定の結果, χ^2（4） = 10.19 （p < .05） で有意差が見られた。残差分析の結果, 女性より男性の方が引っ込み型と怒り-拒

Table 2
男女の SAFS におけるアタッチメント・スタイルのクロス集計表と残差分析結果

		男性		女性		合計
SAFS	とらわれ	9	(-0.47)	32	(-0.47)	41
	引っ込み	13	(2.15*)	20	(-2.15*)	33
	恐れ	17	(-1.21)	66	(-1.21)	83
	怒り - 拒否	4	(2.03*)	3	(-2.03*)	7
	安心	3	(-1.28)	19	(-1.28)	22
合計		46		140		186

注 1）$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$
注 2）（　）内は調整済み残差

否型が多かった。SAFSによるアタッチメント・スタイル分類に男女差が見られたため, 以下の分析も男女別に進めることとした。

妥当性の検討

ECR-RSの分析　古村他（2016）は, ECR-RSの信頼性検討において, 確認的因子分析の結果, ECR-RSの項目5のみ負荷量が低かったことについて, 項目5の邦訳における「心の奥底」という表現が回答者によって異なる意味として捉えられた可能性を指摘し, 項目5の再検討を課題として残している。したがって, 本研究ではECR-RS全9項目の因子構造を調べるため, 因子分析を主因子法, プロマックス回転により行った。いずれの因子にも高い負荷量を示さなかった項目5を削除し, 再度因子分析を行ったところ, 8項目について, 因子負荷量.40以上で2因子を特定した（Table 3）。累積寄与率は54.78%だった。

因子の内容は古村他（2016）の分析結果と一致していた。古村他（2016）は, 第Ⅰ因子を「回避」, 第Ⅱ因子を「不安」と命名したが, 内容をより明確に表すために, ECR-RSのよって立つ尺度であるECRの下位尺度にならい, 「親密性回避」「見捨てられ不安」と命名した。α係数について, 「親密性回避」因子がα = .83, 「見捨てられ不安」因子がα =.81であり, 内的一貫性が確認された。

ECR-RSの各因子得点について, 親密性回避の平均値は3.6（*SD* = 1.27, 中央値3.6, 最小値 1.0, 最大値6.6）であった。また見捨てられ不安の平均

Table 3
ECR-RS の因子分析結果

項目	Ⅰ	Ⅱ
親密性回避（α =.83）		
q9. 私は , 人に個人的なことを相談する。(R)	**0.838**	-0.087
q2. 私は , たいてい人に自分の問題や心配事を話す。(R)	**0.745**	-0.115
q8. 私は , 簡単に人に頼ることができる。(R)	**0.719**	0.137
q3. 必要なときは人に頼り助けてもらうことができる。(R)	**0.713**	0.057
q7. 私は , 人に心を開くことを心地よく感じない。	**0.505**	0.062
見捨てられ不安（α =.81）		
q4. 人が私のことを本当は大切に思っていないのかもしれないと , たびたび心配になる。	-0.036	**0.891**
q1. 私は , 人に見捨てられるのではないかと不安に思う。	0.007	**0.715**
q6. 私が人を大切に思っているほど , その人は私のことを大切に思っていないのではと心配になる。	0.058	**0.695**
因子間相関		0.14
削除項目		
q5. 自分が心の奥底で考えていることを人に知られたくない。		

注）(R) は逆転項目であることを示す。

値は4.3（SD = 1.46, 中央値4.3, 最小値 1.0, 最大値 7.0）であった。ECR-RSの正規性を確認するために, Shapiro-Wilk検定を行ったところ, 親密性回避得点は$p < 0.5$, 見捨てられ不安得点は, $p < 0.01$で有意であり, 正規性に従わないデータであったため, アタッチメント・スタイルの分類を行うために, それぞれの中央値を用いて高低群に分けた。中尾・加藤（2004a; 2004b）による, ECRおよびECR-GOの下位尺度とRQの4類型の関連についての分析結果にならい, アタッチメント・スタイルを分類した。すなわち, アタッチメント・スタイルは, 親密性回避得点のみ高い群を「拒絶」型, 見捨てられ不安得点のみ高い群を「とらわれ」型, 両方の得点が高い群を「恐れ」型, 両方の得点が低い群を「安心」型と命名した。また, サンプル数が男女で偏りがあったため, 各因子得点の男女差を確認するためにMann-WhitneyのU検定を行ったところ, 親密性回避得点および見捨てられ不安得点で有意差は見られなかった（$p = 0.13$, ns; $p = 0.37$, ns）。

SAFSとECR-RSの関連　SAFSにおける, 安心性得点とECR-RSの下位尺度との相関を調べるためにSpearmanの順位相関係数を男女別に算出した（Table 4）。

順位相関分析の結果から, 安心性得点と親密性回避得点の間に, 女性では$r = -.28$ （$p < .01$）と弱い負の相関が, 男性では$r = -.47$ （$p < .01$）と中程度の負の相関が見られた。一方, 見捨てられ不安得点は, 男女ともにVCO得点との有意な関連が見られなかった。

次に, ECR-RSとSAFSにおけるアタッチメント・スタイル分類の関連を検討した。ECR-RSにおける4分類のアタッチメント・スタイルと, SAFSにおける5分類のアタッチメント・スタイルとの関連を調べるために男女別に$\chi 2$検定を行った。男性の結果は, χ^2（12） = 12.28 （ns） だった。一方, 女性はχ^2（12） = 72.69 （$p < .001$） で有意差が見られたため, 残差分析を行った。両尺度の各アタッチメント・スタイルに振り分けられた人数を男女別にクロス集計表に示し, 女性のクロス集計表には残差分析の結果も示した（Table 5, Table 6）。女性について, SAFSのとらわれ型の中でECR-RSの拒絶型と恐れ型の人は有意に少なく, とらわれ型の人が有意に多かった。SAFSの引っ込み型の中で, ECR-RSの拒絶型の人が有意に多かった。SAFSの恐れ型でECR-RSの拒絶型, 恐れ型の人が有意に多く, 安心型の人は有意に少なかった。SAFSの怒り - 拒否型の中で, ECR-RSの恐れ型の人は有意に多かった。SAFSの安心型の中で, ECR-RSの安心型の人は有意に多く, 拒絶型, 恐れ型の人は有意に少なかった。

Table 4
SAFS の VCO 得点と ECR-RS 下位尺度との男女別の順位相関係数

	男性		女性	
	VCO	親密性回避	VCO	親密性回避
親密性回避	.47**	-	-.28**	-
見捨てられ不安	.11	.03	-.06	.15 †

注）**$p < .01$, † $p < .10$。

Table 5
男性の SAFS と ECR-RS における アタッチメント・スタイルのクロス集計表

		ECR-RS				合計
		拒絶	安心	とらわれ	恐れ	
SAFS	とらわれ	1	3	3	2	9
	引っ込み	4	5	2	2	13
	恐れ	5	4	3	5	17
	怒り - 拒否	1	0	2	1	4
	安心	0	3	0	0	3
合計		11	15	10	10	46

再検査信頼性の検討

アタッチメントの安心性を測定するVCO得点の信頼性を検討するため, 1回目調査と3回目調査のVCO得点間で男女別にSpearmanの順位相関係数を算出したところ, いずれも, $r = .67$（$p < .01$）であり, 中程度の相関がみられた。また, 1回目調査と3回目調査の被験者内のVCO得点の一致率としてカッパ係数を男女別に算出したところ, 男性では$\kappa = .61$, 女性では$\kappa = .41$であり, Landis & Koch（1977）の基準における中程度以上の一致が見られた。

次に, 1, 3回目におけるアタッチメント・スタイルの一致率を調べるために, クロス集計表に基づき, 男女別に$\chi 2$検定を行った。男性はχ^2（16）= 43.12（$p < .001$）, 女性はχ^2（16）= 109.03（$p < .001$）であり, 有意差が認められた。さらに残差分析を行った結果, 各スタイルにおいて同一のスタイルを選択した人が有意に多いことが示された。それぞれのクロス集計表と残差分析の結果をTable 7, 8に示した。同一のスタイル選択において, 調整済み残差は男性で2.23 - 3.91の値, 女性では2.81 - 6.13の値をとり, いずれも1%から5%水準

Table 6
女性の SAFS と ECR-RS におけるアタッチメント・スタイルのクロス集計表と残差分析結果

		ECR-RS								合計
		拒絶		安心		とらわれ		恐れ		
SAFS	とらわれ	0	(-2.80**)	9	(-0.19)	23	(5.19**)	0	(-3.31**)	32
	引っ込み	7	(2.54**)	5	(-0.48)	3	(-1.92)	5	(-0.49)	20
	恐れ	15	(2.19*)	11	(-3.05**)	17	(-1.79)	22	(3.53**)	65
	怒り - 拒否	0	(-0.76)	1	(-0.15)	0	(-1.25)	2	(1.97*)	3
	安心	0	(-2.03*)	15	(5.09**)	4	(-1.27)	0	(-2.41*)	19
合計		22		41		47		29		139

注 1）$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$
注 2）（　）内は調整済み残差

Table 7
男性の 1 回目および 3 回目調査におけるアタッチメント・スタイルのクロス集計表と残差分析結果

		3 回目										合計
		とらわれ		引っ込み		恐れ		怒り - 拒否		安心		
1 回目	とらわれ	4	(3.19**)	0	(-1.61)	0	(-1.12)	0	(-0.76)	1	(-0.05)	5
	引っ込み	0	(-1.81)	6	(3.91**)	0	(-1.41)	0	(-0.95)	1	(-0.51)	7
	恐れ	2	(-0.54)	1	(-0.78)	3	(2.53*)	0	(-0.85)	0	(-1.45)	6
	怒り - 拒否	0	(-0.85)	0	(-0.95)	1	(-1.32)	2	(2.23*)	0	(-0.76)	3
	安心	0	(-1.26)	0	(-1.41)	0	(-0.98)	1	(-1.32)	3	(2.92**)	4
	合計	6		7		4		2		5		24

注 1）$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$
注 2）（　）内は調整済み残差

Table 8
女性の１回目および３回目調査におけるアタッチメント・スタイルのクロス集計表と残差分析結果

		3回目										合計
		とらわれ		引っ込み		恐れ		怒り - 拒否		安心		
1回目	とらわれ	11	(5.10**)	1	(-0.62)	3	(-2.61)	0	(-0.91)	0	(-1.54)	15
	引っ込み	1	(-0.61)	3	(2.81**)	1	(-1.99)	2	(-3.4)	0	(-0.98)	7
	恐れ	2	(-3.61)	2	(-1.50)	31	(6.13**)	0	(-1.77)	1	(-2.25)	36
	怒り - 拒否	0	(-0.56)	0	(-0.36)	0	(-1.01)	1	(4.83**)	0	(-0.36)	1
	安心	3	(-0.05)	2	(-0.54)	1	(-3.37)	0	(-0.83)	7	(5.42**)	13
	合計	17		8		36		3		8		72

注 1）$^{**}p < .01$
注 2）（　）内は調整済み残差

で有意であった。また, 男女ともに, 他のスタイル選択で有意な結果はなかった。以上の結果から, 各アタッチメント・スタイル1回目と3回目で同一の型を選ぶ人が有意に多いことが示された。

さらに, 1回目調査と3回目調査のスタイル分類の被験者内一致率を算出するために, カッパ係数を算出したところ, 男性は, κ =.63女性は κ =.60であり, Landis & Koch （1977）の基準ではいずれもかなりの一致であった。

次に質的な側面として, VCOの変遷は以下の通りだった。1回目と3回目においてVCOの人数が変化したのは36人で, そのうち人数が減少したのが17人, 増加したのが19人であった。VCOが減少した人の中で, 「友達」の選択が減った人が13人おり, そのうちの1人は「母」の選択がなくなり, 「きょうだい」を選択した。また, 「その他」の選択がなくなった人, 「母」, 「恋人」の選択がなくなり, 「きょうだい」のみになった人, 「親・子・きょうだい以外の親戚」「父」の選択がなくなった代わりに「友達」を選択した人, 「母」の選択がなくなった人が1人ずつだった。また, VCOが増加した人の中で, 「友達」の選択が増えた人が12人, 「恋人」の選択が増えた人が2人だった。また, 「父」「母」「きょうだい」の選択が増えた人が5人だった。

考察

SAFSの妥当性について

SAFSの安心性尺度の併存的妥当性　相関分析の結果から, 仮説（a）は支持された。SAFSの安心性得点とECR-RSの親密性回避得点に女性では r = -.28 , 男性ではr = -.47の負の相関が見られた。相関の値は高いとは言えないが, 親密性回避尺度得点の高さと安心アタッチメント関係にあるVCOの数の少なさ, すなわちアタッチメントの安心性の低さとの関連が統計的に有意であったことは, SAFSの安心性測定の妥当性を支持すると考える。SAFSはASIに倣い, 自分の心配や問題を相談し, 頼るという接近ができるような安心な関係にあるVCOの人数を安心性の程度として測定する。SAFSの接近は相手に対する信頼という肯定的な他者観に基づいているため, ECR-RSの, 否定的な他者観に基づいて親密性を回避する親密性回避尺度と負の相関を示したことは, SAFSのVCOの人数による安心性の測定の妥当性を示すと考えられる。

一方, SAFSの安心性得点とECR-RSの見捨てられ不安尺度との間には有意な関連が見られなかった。これはECR（中尾・加藤, 2004a）において, 見捨てられ不安の高さは他者観との有意な相関が見られなかったという結果に即しており, SAFSの

妥当性を損なうものではないと考えられる。

SAFSのアタッチメント・スタイル評定の併存的妥当性　次に残差分析の結果から, 仮説（b）は女性についてのみ, 部分的に支持された。まず, SAFSのとらわれ型の中でECR-RSにおいてもとらわれ型に分類される人が有意に多かった。すなわち, SAFSとECR-RSにおけるとらわれ型には同様の特徴を持つ人々が分類される傾向がみられた。また, SAFSのとらわれ型の中で, ECR-RSの拒絶型および恐れ型の人が有意に少なかった。ECR-RSの拒絶型は, アタッチメントにおいて回避傾向が高い, すなわちアタッチメント欲求の非活性化方略というとらわれ型とは反対の方略をとる型の代表であり（Shaver & Mikulincer, 2002）, これもSAFSの妥当性を支持する結果である。ECR-RSの恐れ型は親密性回避も見捨てられ不安もともに高いスタイルであり, 拒絶型と同様に, アタッチメントにおける回避傾向の高さを持ち合わせることから, とらわれ型とは一線を画すと考えられる。次に, SAFSの引っ込み型の中で, ECR-RSの拒絶型が有意に多かったことは, SAFSにおいて引っ込み型がアタッチメント欲求の非活性化方略をとる型であることから, SAFSの妥当性を支持すると考えられる。

次に, SAFSの恐れ型とECR-RSの恐れ型および拒絶型との関連が有意であった。まず, ECR-RSの恐れ型との関連が見られたことは, SAFSの妥当性を支持するものと考えられる。一方で, ECR-RSの拒絶型は見捨てられ不安が低く, 親密性の回避が高い人である。SAFSの恐れ型の人の中に見捨てられ不安が低い人が混じっていたのは, SAFSで測定する恐れ型と, ECR-RSの見捨てられ不安尺度で測るものが, 以下の項目の記述に見るように違っていたことによると考えられる。SAFSの恐れ型項目は, ASIのアタッチメント態度尺度の1つである「拒絶されることへの恐れ」を中心に構成した結果, 「私は, 困った時に人に助けを求めることが苦手です。人との関係では, 急に近づかず, 慎重です。私は, 人が信頼できる人かどうかをよく見ます。人から拒絶されたり, 傷つけられたりするのが恐い方です。―後略―」である。すなわち, 人に拒絶されたり傷つけられたりすることが恐いために人に近づくことができない人が, この型を選択すると考えられる。一方で, ECR-RSの見捨てられ不安の項目は, 「私は, 人に見捨てられるのではないかと不安に思う」「私が人を大切に思っているほど, 人は私のことを大切に思っていないのではと心配になる」「人が私のことを本当は大切に思っていないのかもしれないと, たびたび心配になる」という3つであり, 自分にとって親密な他者, または親密でありたいと思える他者がいることを前提として, その人から見捨てられることに対する不安を表現している。ASIの恐れ型については, Bifulco & Thomas （2013, 吉田他（監訳）2017） によって, 「その恐れが過去において実際に誰かから拒絶や傷つけられることによりがっかりさせられた経験に関連していると」している。ASI, そしてSAFSの恐れ型は, 親密でありたいと思える他者の存在を具体的に想定できないくらいに他者からの拒絶により傷ついて他者に対する恐れを抱いている可能性が高い。すなわち, ECR-RSの見捨てられ不安尺度項目は, SAFSが想定している親密性への絶望にいたるほどの傷つきの深い恐れを測定するには限界があると考えられる。

以上のようにSAFSの恐れ型の人の中で見捨てられ不安は無縁であるために低い一方で,恐れにより親密性回避の行動をとる傾向がある人も, ECR-RSの拒絶型に分類された可能性があると考えられる。また, 人に傷つけられることを恐れて近づけないという非安心の要素が多いSAFSの恐れ型の人の中で, ECR-RSの安心型に分類される人が有意に少なかったことも, SAFSの妥当性を支持している。

SAFSの怒り‐拒否型の中で, ECR-RSの恐れ型の人が有意に多かった。ECR-RSにおける恐れ型は, 見捨てられ不安と親密性の回避の両得点が高いことにより評定される。SAFSの怒り‐拒否型は高い不信感や怒りとともに, 低い「親密さへの欲求」を特徴とするスタイルである（Bifulco & Thomas, 2013 （吉田他（監訳）2017））。ECR-

RSには怒りを測定する項目がないという限界がある。そのため, SAFSにおける親密さへの欲求の低さとECR-RSの親密性の回避の高さの相関は妥当であるが, 怒りについては検討できない。ただ, SAFSの怒り-拒否型の人でECR-RSの見捨てられ不安を高く評定した人は, 見捨てられ不安のために他者に対して不信感や怒りを抱いていた可能性が考えられる。したがって, SAFSの怒り‐拒否型の測定の妥当性の吟味は, 今後, 攻撃性の尺度を加えて検討する必要があるが, 本研究の結果が妥当性を否定するものとまでは言えない。また, 本研究の女性の対象者において, 怒り-拒否型の人数が139名中3名であった。Ikeda et al.（2014）による, 日本におけるASIを用いた妊産婦のデータにおいて, 怒り-拒否型の割合は9%だったことから, 本研究のサンプルにおける割合はやや少なかったと言える。これは強制選択式の質問において, 攻撃性の高さを想起させる怒り-拒否型を選択しにくかった可能性もあり, 質問紙法の限界とも考えられる。しかし, 理論上では回避型に分類されるべき怒り-拒否型が, ECR-RSにおいては「恐れ型」の特徴を呈したことから, 引っ込み型および怒り-拒否型を区別すること, また攻撃性を加味した上で恐れ型と怒り-拒否型を区別することは, 臨床的な意義があると考えられ, 今後の検討が期待される。

さらに, SAFSの安心型の中で, ECR-RSの安心型の人が有意に多く, かつ, ECR-RSの拒絶型および恐れ型の人は有意に少なかった。これはSAFSの妥当性を支持する。

以上のことから, SAFSとECR-RSにおいて, 「恐れ型」については項目内容にずれがあったこと, ECR-RSにおいてSAFSの怒り―拒否型の概念に含まれる攻撃性を測定する方法が欠けていたという限界はあったが, SAFSの恐れ型以外のスタイルの分類において, 対象者内でスタイルの内容が一致すること, 怒り‐拒否型においても概念的に妥当なスタイルに分類されたことにより, 全体としては, 女性について, SAFSの併存的妥当性が示されたと考える。

一方, 男性については, アタッチメント・スタイル分類に関してECR-RSとの関連が示されなかった。したがって, 本研究において, SAFSのスタイル分類の妥当性に関する結果は, 女性に限定的である。これは, 本データにおける男性サンプルの少なさにより, 統計的な誤差が大きく見積もられた可能性が考えられるため, 今後男性サンプルを増やした検討が必要である。

再検査信頼性の検討

VCO得点について, 1, 3回目調査間で男女ともに, 中程度の相関があることが示され, カッパ係数からも中等度の一致が示された。質的側面の検討からは, VCOの人数が変化した人の中で, 「友人」選択の増減が多かった。Bowlby（1969/1982 黒田他訳）はアタッチメント対象は親から友人, そして性的関心を伴ったパートナーへ移行すると述べており, それを支持する研究結果も得られている（Hazan & Shaver, 1987 ; Fraley & Davis, 1997）。しかし, その移行の過程で友人関係の破綻, 恋人の出現など, 青年期の人間関係の不安定さを考えると, アタッチメント対象の数の増減が短い期間に生じた場合もあるだろうと考えられる。

一方で, 青年期における親は, 必ずしもアタッチメント対象として機能しなくなるわけではないことも明らかになっている。片岡・園田（2010）はFealey & Davis（1997）の研究結果において, 親は「近接性の維持」「安全な避難所」「分離不安」というアタッチメント対象としての機能は果たさなくなるが, 「安全基地」の対象として期待され続けると解釈できると述べた。また, 17歳時点において, 6-17歳を対象としたHazan & Zeifman（1994）の結果と比べ, 大学生を対象としたFraley & Davis（1997）では, 17歳時点で「安全基地」の対象としての親が10%多いことから, 大学生になると再び親がアタッチメント対象として選択される可能性として解釈できると述べている（片岡・園田, 2010）。さらに片岡・園田（2010）の研究では, 大学生で恋人がいない人は, 親や友人をアタッチメント対象として選択する傾

向が示されている。したがって, 親やきょうだいがあらためて本研究対象者のVCOとして認識されたことは, これらの知見に沿った現象である可能性もある。したがって対象者が青年期であり, その対人関係の変化可能性を考慮すると, 自己選択式のVCOの人数の一致率は, 妥当な値と考えられる。

また, アタッチメント・スタイルについて, カッパ係数は, 男性で κ =.63, 女性で κ =.60で, 中程度の一致率であった。数値としてはやや低いが, SAFSの5分類のアタッチメント・スタイルそれぞれのサンプル数に偏りがあり, 非常に少ないサンプル数のスタイルもあることが原因として考えられる。今後より大きなサンプルにおける検討が期待される。

本研究の限界と今後の展望

本研究は関東圏内の私立大学における青年期の対象者について行われたものであり, 一般化には限界がある。また, サンプルサイズが小さく, 特に男性の人数が少なかったことからSAFSのアタッチメント・スタイル分類においてスタイル間の人数に差があったことが, 統計的な分析に影響した可能性も考えられる。今後, 幅広い年齢層, および大きなサンプルにおいて検討される必要がある。

また, 併存的妥当性尺度のECR-RSがSAFSの尺度に対応していない部分についても今後攻撃性の尺度を加えるなどの検討が必要である。さらに, SAFSにおける自己回答式のアタッチメント・スタイル分類について, ASI-Jを用い, 訓練を受けた面接者による判定との一致度を検討する事が必須である。この点について, 今後, 追加サンプルのデータを用いて検証する。

SAFSは, アタッチメント関係の安心性を得点化するとともに, 臨床的に意義を持つアタッチメント・スタイルの5分類を可能にする簡便な質問紙として, 研究や臨床の発展に貢献するものとなる可能性を持つ。本研究に限界はあるものの, SAFSの妥当性, 再検査信頼性を示す予備的な調査として位置づけ, 今後の検証が期待される。

脚注

1. 本研究において, ご協力下さった全ての学生の皆様に厚く御礼申し上げます。また, 調査においては, ご多忙の中ご協力下さった, 立教大学の先生方に心より感謝申し上げます。

また, 立教大学現代心理学部助教, 嘉瀬貴祥先生には, 統計分析の方法について丁寧にご助言をいただき, 貴重な研究成果を得ることができました。深く感謝申し上げます。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. （1978）. *Patterns of Attachment : A Psychological Study of the Strange Situation* .Psychology Press, New York., 22.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. （1991）. Attachment styles among young adults : A test of four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 226-244.

Bifulco, A., Brown, Lillie, A., Ball, B., & Moran, P. （1998）. *Attachment Style Interview （ASI）. Training manual. Royal Holloway, University of London.*

Bifulco, A., Known, J., Jacobs, C., Moran., P. M., Bunn, A., & Beer, N. （2006）. Adult attachment style as mediator between childhood neglect/abuse and adult depression and anxiety. *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology, 41*（10）, 796-805.

Bifulco, A., Lillie, A., Ball, B. and Moran, P. （2002）. *Attachment Style Interview For Research & Clinical Practice.*（ビフィルコ, A・ボール, B・モラン, P 林もも子・吉田敬子（監修）（2016）. 日本版アタッチメント・スタイル面接（ASI-J））

Bifulco, A., Moran, P. M., Ball. C., & Bernazzani, O. （2002a）. Adult attachment style. Ⅰ:

Its relationship to clinical depression. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 37*, 50-59.

Bifulco, A., Moran, P. M., Ball. C., & Lillie, A. （2002b）. Adult attachment style. Ⅱ: Its relationship to psychosocial depressive – vulnerability. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 37*, 60-67.

Bifulco, A., Moran, P., Jacobs, C., & Bunn, A. （2009）. Problem partners and parenting : exploring linkages with maternal insecure attachment style and adolescent offspring internalizing disorder. *Attachment & Human Development*, *11*（1）, 69-85.

Bifulco, A., & Thomas, G. （2013）. *Understanding adult attachment in family relationships : research assessment and invention* Routledge. （ビフィルコ, A・トーマス, G 吉田 敬子・林 もも子・池田 真理（監訳）（2017）. アタッチメント・スタイル面接の理論と実践 家族の見立て・ケア・介入 金剛出版）

Bowlby, J. （1969/1982）. *Attachiment and Loss. Vol.1: Attachment*. London: Hogarth Press.（ボウルビィ, J 黒田 実郎・大羽 蓁・岡田 洋子・黒田 聖一（訳）（1991）. 母子関係の理論 I ――愛着行動―― 岩崎学術出版社）

Bowlby, J. （1980）. *Attachiment and Loss. Vol.3: Attachment*. London: Hogarth Press.（ボウルビィ, J 黒田 実郎・大羽 蓁・岡田 洋子・黒田 聖一（訳）（1991）. 母子関係の理論Ⅲ――対象喪失―― 岩崎学術出版社）

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. （1998）. Self report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes （Eds.）, *Attachment theory and close relationships*. （pp. 46-76）. New York: Guilford Press.

遠藤 利彦 （2005）. アタッチメント理論の基本的枠組み数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメント――生涯にわたる絆―― （pp.1-31）. ミネルヴァ書房

Fraley, R. C. & Davis, K. E. （1997）. Attachment formation and transfer in young adults' close friendships and romantic relationships. *Personal Relationships*, *4*, 131-144.

Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. （2011）. The experiences in close relationships- relationship structures questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. *Psychological Assessment, 23*, 615– 625.

Fraley, R. C., & Shaver, P. R. （2000）. Adult Romantic Attachment: Theoretical Developments, Emerging Controversies, and Unanswered Questions. *Review of General Psychology*, *4*（2）, 132-154.

Gerlsma, C., & Luteijn, F. （2000）. Attachment style in the context of clinical and health psychology : A proposal for the assessment of valence, incongruence, and accessibility of attachment representations in various working models. *British journal of medical psychology*, *73*, 15-34.

Griffin. D. W., & Bartholomew, K. （1994）. Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 430-445.

林 もも子 （2007）. 不登校の長期化と母親のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 （編）（pp. 211-233） アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房

林 もも子 （2010）. 思春期とアタッチメント みすず書房

Hazan, C., & Shaver, P. R. （1987）. Romantic Love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*, 511-524.

Ikeda, M., Hayashi, M., & Kamibeppu. （2014）. The relationship between attachment style and postpartum depression, *Attachment & Human*

Development, *16*（6）, 557-572.

岩崎 美奈子・山崎知克 （2017）. 母親のアタッチメント・スタイルを考慮した心理社会的支援の有用性――治療継続に支障をきたした発達障害児6症例における検討―― 小児の精神と神経:日本小児精神神経学会機関誌 *56*（4）, 353-360.

片岡 祥・園田 直子 （2010）. 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ 久留米大学心理学研究, *9*, 1-8.

加藤 和生 （1998/9）. Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度（RQ）の日本語版の作成 認知・体験過程研究, *7*, 41-50.

古村 健太郎・村上 達也・戸田 弘二 （2016）. アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）日本語版の妥当性評価　心理学研究, *87*, 303-313.

Landis JR, Koch GG. （1977） The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics 33*, 159-174.

Main, M., & Goldwin, R. （1984）. Adult Attachment scoring and classification system. *Unpublished manuscript University of California*, Berkeley

McCarthy, G. （1999）. Attachment style and adult love relationships and friendships: A study of a group of woman at risk of experiencing relationship difficulties. *British Journal of Medical Psychology*, *72*, 305-321.

Mickelson, K. D., Kessler, R. C., & Shaver, P. R. （1997）. Adult attachment in a nationally representative sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*（5）, 1092-1106.

Murphy, B., & Bates, G. W. （1997）. *Adult attachment styles and vulnerability to depression. Personality and Individual Differences, 22*, 835-844.

中尾 達馬 （2017）. 第6章 質問紙法 北川 恵・工藤 晋平（編）アタッチメントに基づく評価と支援 （pp. 117-134）. 誠信書房

中尾 達馬・加藤 和生 （2004a）. 成人愛着スタイル尺度（ECR）日本語版作成の試み 心理学研究, *75*, 154-159.

中尾 達馬・加藤 和生 （2004b）.「一般他者」を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, *5*, 19-27.

Ravitz, P., Maunder, R., Hunter, J., Sthankiya, B., & Lancee, W. （2010）. Adultattachment measures: A 25-year review. *Journal of Psychosomatic Research*, *69*, 419–432.

Shaver, P. R., & Mikulincer, M. （2002）. Attachment-related psychodynamics. *Attachment and Human Development, 4*, 133–161.

Steinberg L., & Silverberg, S. B. （1986）. The vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development, 57*, 841-851.

吉田 敬子 （2001）. 周産期精神医学の最近の動向――研究方法の広がりと進歩 up to date――季刊 精神診断学, *12*（3）, 287-305.

吉田 敬子・林 もも子・Bifulco, A. （2003）. アタッチメント・スタイル面接による養育者の対人関係能力の評価方法――日本版 Attachment Style Interview （ASI） の信頼性と有用性の検討―― 季刊 精神科診断学, *14*, 29-40.